

Library News



京教図書館 News

2009

1

図書館ニュース100号記念特集号

「知への誘い」としての「図書館ニュース」

— 第100号を記念して —

図書館長 位藤 紀美子

「図書館ニュース」は、平成12年10月号（小寺正一館長の時）に、第1号が出され、その後、毎月発行されてきた。始めは、図書館の行事や開館予定等のお知らせを中心とした2ページものであったが、第5号（平成13年2月）からは、「私のすすめるこの1冊」欄が、さらに平成15年11月、第38号（寺田光世館長（現学長）の時）からは、「論のくちび理のむすび」欄が設けられ、4ページものとして、今日まで継続されてきている。それ以外にも、図書館員による「図書館の豆知識」や「博物館訪問記」、また学生・院生からの図書館についての文章が載せられるなど、学生から教職員まで多様な利用者に向けて、いろいろな読み物記事が工夫されている。いずれも、本学図書館の存在を知ってもらい、学生・教職員それぞれの日々の大学生活に活用していただくためのものである。

なかでも、「私のすすめるこの1冊」欄は、第1回目の井本伸廣先生（学長（現名誉教授））による『盲目の科学者—指先でとらえた進化の謎—』（ヒーラット・ヴァーメイ著、羽田裕子訳）に始まり今月号まで、8年間に及び、多種多様な分野にわたって計97点（そのうち『街道をゆく』〈全43冊、司馬遼太郎著〉は、2回推薦）が紹介されている。また、「論のくちび理のむすび」欄は、「本学の先生が執筆された論文を自らご紹介いただく」コーナーとして、主に本学紀要論文を中心に纏められたもので、いずれも、特に学生に向けて、読書や学習・研究への糸口となる記事である。

毎月の「図書館ニュース」が、利用者にとって、新鮮な「知への誘い」として機能するとともに、こうして節目ごとに蓄積されたものが、本学の集積された「知の宝庫」として、それぞれの利用者の「知の泉」を豊かに湧かせるきっかけになればと願っている。

今年、本学の図書館も、学内の学生や教職員の学修や教育・研究の支援、また学外への学術情報の提供の一つのありかたとして、「京都教育大学学術情報リポジトリ」を立ち上げることになった。3月に試験公開（学内限定）を始め、10月には本公開予定で、準備を進めている。教員養成、教師教育を担う本学の目的に合わせて、いっそう充実した図書館づくりを構想しているところである。

利用者のかたがたのご要望やご意見をぜひお聞かせください。

図書館の改革

学長 寺田 光世

図書館ニュース第100号発行のめでたい節目を迎えました。関係の皆様にお礼を申し上げますとともに、この先、200号を目指して引き続き継続発行されるよう心より願っています。

私は古本屋を巡ったり、古本即売の催しに出かけたり、旅先で時間があれば古本屋に入ることがよくあります。海外旅行中でも同じです。ロンドンでもウィスコンシンでも、わずか数日の滞在にも拘わらず、古本屋で過ごす時間の方が観光より長かった覚えがあります。この贅沢で奇妙な行動は生来のものか、学生時代に本を買う余裕がなくて仕方なく始めた古書の立ち読みが習慣化したものかは定かではないが、ただ、古本に囲まれて居ると心が豊かになり、何とも言えない力が湧いてきます。もちろん個人的な感覚ですが図書館に入るときは閲覧室よりホコリとカビの臭いのする書庫へ入る方が満ち足りた気分になります。一度に多くの本と出会うこともできますしね。

さて、本学図書館の現状に対する要望や指摘事項はかねてから沢山いただいています。狭隘であること、蔵書が少なく、見たい専門書や新刊が少ないこと、蔵書の集中管理ができていないことなどです。本を購入しても空き書架がないために、一定基準のもとで抹消に実害の生じる可能性が低い本から抹消処分していくことにより、新スペースを生み出す以外に対処する方法がないのが現実です。実害の低い本といえども、本を抹消するのは身を切る思いに近いものがあります。図書館職員も同じ思いでしょう。新しい本を購入しても教員研究室に分散配置せざるを得なくて、利用しにくく、館内蔵書や新刊書・専門書が少なく、それらが悪評高い図書館の原因になっています。悪循環しているわけです。この悪循環を断つには出血を伴うような大手術が必要です。つまり、本学図書館の社会的使命をいっそう明確にすること、選書方針を絞り込むこと、蔵書スペースを増やすことです。これらの手立てを打ち出さなければ、今後も課題は未解決のまま残り、これまでの指摘が繰り返されるでしょう。

本学図書館は一般図書館と明らかに異なります。教育大学における「教育」研究のための専門図書館であることを明確にすべきです。その上に立って、できるところから手立てを打つことが必要です。大学附属図書館は改めて言うまでもなく大学のシンボルですから、本学は、今、図書館改革の気概を改めて強くもち、私たちの手で大手術を施す必要があります。今、そのときが来ているように思います。

要塞を訪ねて — 大英図書館ドキュメント・サプライ・センター紀行 —

英文学科教授 太田 耕人

リーズに旅したのは、7年前の8月半ばのことだった。英国北部のうつくしい都市は、もう初秋の風が立っていた。

どうしても読みたい論文があった。附属図書館から大英図書館に複写を頼んだが謝絶された。コピーを許さぬ雑誌だと書き添えてあった。

世界中からの複写依頼を、大英図書館は48時間以内に処理して郵送している。ただし年400万件の複写をこなすのは、ロンドンの本館ではない。ロンドンから特急で二時間半、リーズ市近郊にあるドキュメント・サプライ・センター（DSC）である。

そこがコピーを断ってきた。行って読むしかない。夏に英国に赴いて、DSCに電話した。駅からバスで15分くらいだという。

屋前にリーズ駅に着いた。ブリゲイト通りの坂をのぼると、すでにバスが停まっている。バスはほどなく市街地を出て、田園を縫うように走った。羊のちらばる牧草地を過ぎ、小さな森をぬけ、かわ

いい家がよりそう集落を訪ねて、ひた走った。不安になって運転手に尋ねると、前席のカーディガンをはおった婦人が、自分の降りる次で降りろ、と教えてくれた。

リーズから 45 分、にっこりと会釈して婦人が下車した後も、いっこうにそれらしい建物はみえてこない。バスは次の停留所を通りこして大きく左折した。あわてて運転手に声をかけ、停まってもらう。

見渡すばかりの麦畑である。

若い運転手が指さす方角をみると、麦畑のかなたに小さく、要塞のような灰色の塊がみえた。

王立軍需工場のこの広大な跡地に、国立科学技術図書館が発足したのが 1962 年。1985 年に DSC に改組された。他の図書館への貸出に特化して、700 万冊の書籍に加え、英語の雑誌を網羅し、あらゆる言語の定期刊行物や楽譜を収集する。

たどり着いた閲覧室は、やけに閑散としていた。入館証は不要。受付でサインしさえすればよいのだが、台帳にある署名は 10 名にも満たなかった。館員の姿も、ちらほらとしかみえない。

しかし、さすがだった。6 万種をこす雑誌から、請求した学術誌がでてくるまで、わずか 20 分。ベルトコンベアと連結式リフトからなる自動資料運搬システムの威力だろう。これを読むため日本から来たと洩らすと、係員がしてくれた。「…コピーして、いいですよ」。

16 時半の閉館とともに外に出た。無人と思われた無機質な建物群から、陸続と人の群れが出てくる。バスが次々にきて、家路につく館員を運んでゆく。

思いがけない光景に胸がふるえた。

機械化もたいせつだが、人間がいなければ図書館は動かない。あの夕暮れを憶いだすたび、そう思う。

図書館のちから

図書館 主査 米谷 昌代

みなさんは、図書館を利用されていますか？インターネットで十分…と、敬遠している方も多いのではないのでしょうか？

確かに、インターネットに接続すれば、様々な学術情報の入手も無理ではありませんが、学生（院生）として、系統立てた学習、調査・研究をするにあたっては、次のような点で、大学図書館に軍配が上がると思います。

一般的に大学図書館というのは、各専門の学問領域を中心にした蔵書構成になっており、またそれぞれの分野の入門書から高度なものまで、さらに、一方的な理論展開を避けるため、同分野の様々な意見の図書等を備えています。それに加え、最新のものだけでなく、過去から現在までの資料を縦覧することができます。蔵書のほとんどは、既に成果として認められ、第三者評価が確立しているもので構成されており、過去から最近までの一定レベル以上の資料が継続的に提供されているといえます。

対するインターネット上（無料）の情報は、先端の学術情報からデマまで、また、著者も第一人者からズブの素人までと、ありとあらゆるものがあり、過去には存在した情報が、いつの間にか上書きされたり、なくなってしまうたりということも少なくありません。

このような玉石混交の情報の中から、正しくて必要な情報を探し出すのは大変困難な仕事です。基礎力のない場合や、専門に不慣れな場合などは、出てきた情報が正しいかどうかの判断を下すこともできないのではないのでしょうか。ただし、十分基礎知識のある場合は、問題なく利用できるでしょうし、むしろ図書資料より便利に使える部分もあると思います。このような使い分けができるようになると情報の収集力が広がります。

図書館は、情報ネットワーク社会においても「知の宝庫」です。ぜひ上手に活用して、今後の生活に役立ててもらえたらと思っています。

図書館ニュース「私のすすめるこの1冊」一覧 2001年2月～2008年12月

※ 1月記念号で一部誤りがありましたので、お詫びして訂正します。
(掲載漏れであったため追加した箇所・・・第79号 2007年4月発行分)

発行号	発行年月	タイトル	著者等	発行所	推薦者	所属等
5	2001年2月	盲目の科学者 指先でとらえた進化の謎	ヒーラット・ヴァーメイ 著 羽田 裕子 訳	講談社	井本 伸廣	学長
6	3月	記憶の肖像	中井 久夫 著	みすず書房	駒田 聡	国文学科
7	4月	木のいのち木のころ(天)	西岡 常一 著	草思社	木代 喜司	美術科
8	5月	初等整数論講義(第2版)	高木 貞治 著	共立出版	宮崎 充弘	数学科
9	6月	物理学とは何だろうか 上・下(岩波新書)	朝永 振一郎 著	岩波書店	村田 隆紀	学長
10	7月	みんなの深層心理	きたやま おさむ 著	講談社	内田 利広	教育学科
11	8月	今昔物語集(本朝世俗部)1～4		新潮社	小寺 正一	副学長
12	9月	宇宙からの帰還(中公文庫)	立花 隆 著	中央公論新社	前川 紘一郎	理学科
13	10月	「自分の木」の下で	大江 健三郎 著	朝日新聞社	手島 光司	副学長
14	11月	回思九十年	白川 静 著	平凡社	川口 容子	音楽科
15	12月	歎異抄	唯 円 著	永田文昌堂	友久久雄	発達障害学科(図書館長)
16	2002年1月	安楽病棟(新潮文庫)	帚木 蓬生 著	新潮社	井上 文夫	体育学科
17	2月	ドードーの歌 -美しい世界の島々からの警鐘 上・下	ディヴィッド・クォメン 著	河出書房新社	松良 俊明	理学科
18	3月	育児力・子どもの成長・おとなの成長(ちくま文庫)	藤村 美津、伊藤 昌子 著	筑摩書房	太田 正己	発達障害学科
19	4月	子どもたちはなぜキレるのか(筑摩新書)	斎藤 孝 著	筑摩書房	野原 弘嗣	体育学科(附属教育実践総合センター長)
20	5月	それでも人生にイエスと言う	V. E. フランクル 著 山田 邦男 他訳	春秋社	吉村 文男	図書館長
21	6月	銃・病原菌・鉄 上・下	ジャレド・ダイヤモンド 著 倉骨 彰 他訳	草思社	吉村 文男	図書館長
22	7月	盲導犬クイールの一生	石黒 謙吾 文 秋元 良平 写真	文芸春秋	杉本 弘子	家政科(保健管理センター長)
23	8月	ハーメルンの笛吹き男:伝説とその世界(ちくま文庫)	阿部 謹也 著	筑摩書房	奈倉 洋子	英文学科
24	9月	超少子化 -危機に立つ日本社会(集英社新書)	鈴木 りえこ 著	集英社	辻 朗	社会科学科(情報処理センター長)
25	10月	行動の構造	メルロ＝ポンティ、M 著 滝浦 静雄、木田 元 訳	みすず書房	矢野 喜夫	教育学科(附属養護学校長)
26	11月	日本人の英語(岩波新書)	マーク・ピーターセン 著	岩波書店	伊吹 紀男	理学科
27	12月	狂雲集全釈	平野 宗浄 著	春秋社	真神 仁宏	美術科
28	2003年1月	フロー体験 喜びの現象学	M.チクセントミハイ 著 今村 浩明 訳	世界思想社	和田 尚	体育学科
29	2月	ベートーヴェンの日記	Ludwig van Beethoven 著 メイナード・ソロモン 編 青木 やよひ 久松 重光 訳	岩波書店	垣内 幸夫	音楽科
30	3月	家政学未来への挑戦	日本家政学会 訳 家政学原論部会 翻訳	建 社	加地 芳子	家政科(附属京都中学校長)
31	4月	文章読本さん江	斎藤 美奈子 著	筑摩書房	来田 隆	国文学科
32	5月	身体の零度	三浦 雅士 著	講談社	寺田 光世	図書館長(体育学科)
33	6月	新しいスクールカンセリング -学校におけるナラティブ・アプローチ	J・ウィスレンド G・モンク 著 小森 康永 訳	金剛出版	本間 友巳	附属教育実践総合センター
34	7月	街道をゆく(全43冊)	司馬 遼太郎 著	朝日新聞社	植山 俊宏	国文学科
35	8月	いまだき真っ当な料理店 それでも真っ当な料理店	田中 康夫 著	ひあ	宗雪 修三	国文学科
36	9月	森林文化への道(朝日選書529)	筒井 迪夫 著	朝日新聞社	山下 宏文	社会科学科
37	10月	バカの壁	養老 孟司 著	新潮社	後藤 景子	家政科
38	11月	柿の種(ワイド版岩波文庫227)	寺田 寅彦 著 池内 了 解説	岩波書店	占部 博信	数学科
39	12月	実践としての芸術	アントニ・タビエス 著 田澤 耕 訳	水声社	岩村 伸一	美術科
40	2004年1月	飛鳥(岩波新書 新赤版850)	和田 萃 著	岩波書店	八塚 春児	社会科学科
41	2月	自然農法・わら一本の革命	福岡 正信 著	白樹社	広木 正紀	理学科
42	3月	映画の構造分析:ハリウッド映画に学ぶ現代思想	内田 樹 著	晶文社	太田 耕人	英文学科
43	4月	「なし」				
44	5月	表現を味わうための日本語文法	森山 卓郎 著	岩波書店	森山 卓郎	国文学科
45	6月	人間 -その精神病理学的考察	Goldstein, Kurt 著 西谷 三四郎 訳	誠伸書房	田中 道治	発達障害学科
46	7月	疲れた身体をリフレッシュQ&A	寺田 光世 著	ミネルヴァ書房	寺田 光世	体育学科
47	8月	森林の思考・砂漠の思考	鈴木 英夫 著	ニホン放送協会	武田 一郎	社会科学科
48	9月	大村はま講演集 上 人と学力を育てるために	大村 はま 著	風濤社	位藤 紀美子	国文学科
49	10月	動物と人間の世界認識	日高 敏隆 著	筑摩書房	細川 友秀	理学科
50	11月	リサイクルアンダーワールド	石渡 正佳 著	WAVE出版	水山 光春	社会科学科
51	12月	ブリュージュへの旅	中野 孝次 著	文芸春秋	奈倉 洋子	英文学科
51	12月	ブリュージュの「子どもの遊戯」	森 洋子 著	未来社	奈倉 洋子	英文学科
52	2005年1月	「なし」				
53	2月	鉄棒する漱石、ハイジャンプの安吾	矢島 裕紀彦 著	NHK出版	山下 宏文	体育学科
54	3月	聴覚障害者が見たアメリカ社会 障害者法と情報保障	しみず よりお 著	現代書館	冷水 來生	発達障害学科

発行号	発行年月	タイトル	著者等	発行所	推薦者	所属等
55	4月	スポーツ・ジェンダー学への招待	飯田 貴子 井谷 恵子 著	明石出版	井谷 恵子	体育学科
56	5月	虞美人草	夏目 漱石 著	岩波書店 他	伊藤 徹	社会科学科
57	6月	愛するということ	エリック・フロム 著 懸田 克躬 訳	紀伊国屋書店	村上 登司文	教育学科
58	7月	これからのすまい 一住様式の話	西山 卯三 著	相模書房	関川 千尋	家政科
59	8月	街道をゆく(全43冊)	司馬 遼太郎 著	朝日新聞社	梶原 裕二	理学科
60	9月	おたまじゃくし無用論	小泉 文夫 著	いんなあととりづ	田中 多佳子	音楽科
61	10月	巨岩と花びら	船越 保武 著	筑摩書房	谷口 淳一	美術科
62	11月	魂込め(まぶいぐみ)(朝日文庫)	目取真 俊 著	朝日新聞社	日比 嘉高	国文学科
63	12月	シンデレラの時計	角山 栄 著	ぼぶら社	岡本 正志	附属教育実践総合センター
64	2006年1月	桃紅えほん	篠田 桃紅 著	世界文化社	上田 博之	美術科
65	2月	豚のPちゃんと32人の小学生	黒田 恭史 著	ミネルヴァ書房	渡邊 伸樹	数学科
66	3月	「幸福な偶然」をつかまえる	日野原 重明 著	光文社	中西 洋子	家政科
67	4月	死者の書(中公文庫)	折口 信夫 著	筑摩書房	和田 萃	社会科学科
68	5月	チーム・パチスタの栄光	海堂 尊 著	宝島社	小谷 裕実	発達障害学科
69	6月	走る人!	岡崎 圭 著	吉備人出版	榎本 靖士	体育学科
70	7月	食品の裏側	阿部 司 著	東洋経済新報社	土屋 英男	産業技術科学科
71	8月	血染めの部屋(ちくま文庫)	アンジェラ・カーター 著 富士川 義之 訳	筑摩書房	坂田 薫子	英文学科
72	9月	「なし」				
73	10月	吉川幸次郎全集、吉川幸次郎遺稿集、 吉川幸次郎講演集	吉川 幸次郎 著	筑摩書房	谷口 匡	国文学科
74	11月	天使と悪魔 上・下	ダン・ブラウン 著 越前 敏弥 訳	角川書店	佐竹 伸夫	数学科
75	12月	ファウジーヤの叫び	ファウジーヤ・カシ ンジャ、レイリー・ミ ラー・パッシャー 著 大野 晶子 訳	ソニー・マガジズ	笹野 恵理子	音楽科
76	2007年1月	音読したい英語名言300選・覚えたい順	英語名言研究会 編著	中経出版	加用 文男	幼児教育科
77	2月	神が見つけた究極の素粒子 上・下	レオン・レーダーマン 著 高橋 健次 訳	草思社	高嶋 隆一	理学科
78	3月	知的複眼思考法	苅谷 剛彦 著	講談社	伊藤 悦子	教育学科
79	4月	”弁当の日”がやってきた	竹下 和男 著	自然食通信社	梁川 正	附属環境教育実践センター
79	4月	台所に立つ子どもたち	竹下 和男 著	自然食通信社	梁川 正	附属環境教育実践センター
80	5月	在日外国人 一法の壁、心の溝 新版	田中 宏 著	岩波書店	浜田 麻里	国文学科
81	6月	保育に生きた人々	岡田 正章 他編著	風媒社	山口 一雄	幼児教育科
82	7月	闇金ウシジマくん 1～8巻(ビッグコミックス)	真鍋 昌平 著	小学館	井上 えり子	家政科
83	8月	ゲド戦記 1～5巻	ル＝グウィン 著 清水 真砂子 訳	岩波書店	村上 忠幸	理学科
84	9月	アパ・ルーム(The Upper Room) ビッグ・イシュー(The Big Issue)			関根 文太郎	産業技術科学科
85	10月	賢者も来タリテ遊ベシ 福祉の里 茗荷村への道	田村 一二 著	日本放送出版協会	村田 利裕	美術科
85	10月	歴史都市・京都から学ぶ ジュニア日本文化検定テキストブック	京都新聞開発(株) 編	京都新聞出版センター	小豆 恭一	図書館
86	11月	夢をかなえるソウ	水野 敬也 著	飛鳥新社	遠藤 浩	体育学科
87	12月	田んぼの忘れもの	宇根 豊 著	葦書房	坂東 忠司	理学科
88	2008年1月	伝説の算数教科書<緑表紙>	松宮 哲夫 著	岩波書店	奈倉 洋子	英文学科
89	2月	メディア・コントロール ～正義なき民主主義と国際社会～	ノーム・チョムスキー 著 鈴木 主税 訳	集英社	浅井 和行	附属教育実践総合センター
90	3月	伝承遊び考1 絵かき遊び考	加古 里子 著	小峰書店	平井 恭子	幼児教育科
91	4月	新版 論理トレーニング	野矢 茂樹 著	産業図書	大竹 博巳	数学科
92	5月	レトリックと人生	G・レイコフ M・ジョン ション 著 渡部 昇一 他訳	大修館書店	二枝 美津子	英文学科
93	6月	光と物質のふしぎな理論 一私の量子電磁力学	R・P・ファインマン 著 釜江 常好 大貫 昌子 訳	岩波書店	沖花 彰	理学科
94	7月	自閉症児イアンの物語 脳と言葉と心の世界	ラッセル・マーティン 著 吉田 利子 訳	草思社	水谷 宗行	教育学科
95	8月	ぼくの家は「世界遺産」	小松 義夫 著	白水社	榎原 典子	家政科
96	9月	パソコンで見る動く分子事典 Windows Vista対応版 分子の三次元構造が見える・わかる	川端 潤 著	講談社	向井 浩	理学科
97	10月	大阪弁「ほんまもん」講座	札埜 和男 著	新潮社	安東 茂樹	産業技術科学科
98	11月	共通感覚論(岩波現代文庫 他)	中村 雄二郎 著	岩波書店	石川 誠	美術科
99	12月	恋う・癒す・究める 脳科学と芸術	小泉 英明 編著	工作舎	斎藤 百合子	音楽科

※ 推薦者の所属等は、当時の所属です。

小説よりも奇なる事実を認識する ―あなたは何故読みますか?―

大学院 教育学研究科 教科教育専攻 理科教育専修 上林 彰仁

12月上旬、本学で「就職支援セミナー」なるものが開催された。『出版社に入社し、著名人へのインタビューを企画する。あなたなら誰を取り上げるか?』という課題が、客員の講師殿から示された。私は、「『国家の品格』(新潮社、2005)の著者・藤原正彦先生(数学者; お茶の水女子大学教授)です」と率直に答えた。「面白くない」と言われた。だが、誰が何と言おうと私は会いたい。あの‘1年前の罪’を、どうしても直接お詫びしたいのだ。

2007年11月、ある国際学会で、K女史という美しい考古学者に出会った。一目惚れだった。雪が如く白い肌、揺蕩う艶やかな黒髪、笑顔とともに輝く白い歯……彼女が持つ全ての美に、私は魅せられた。いつの間にか、私は彼女をナンパしていた。夢の様に楽しかった時間。どちらからだったろう?ふと、“藤原正彦”というキーワードが挙がった。何とK女史は、あの藤原先生と同じ大学の助教授だったのだ。処女作『若き数学者のアメリカ』(新潮社、1977)以降の全著作*を読破した私。このチャンスを生かさぬ訳にはいかなかった。初めは、数多ある先生の名著において互いが琴線に触れた部分を語り合い、共感し合うだけで充分だった。が、次第にそれだけでは物足りなくなっていた。——どうにかしてK女史に一目置かれたい——次の瞬間、私は有り得ない事を口走っていた。「僕、藤原先生の研究室に一人でお邪魔しました!」——彼女の目の色が瞬時に変わった(無論、一介の学生である私が、容易く文壇の大家に会える筈がない)。結局、この淡い恋は成就しなかったが、当代稀に見る麗人と過ごせた夢の一時は生涯の思い出となった。しかし、夢などすぐに醒めるもの。学会の帰り道、途方も無い罪悪感が私を襲った。

‘事件’の翌日、私は、お茶の水女子大学理学部数学教室のホームページを覗いていた。藤原先生の公的な連絡先はすぐに見付かった。駄目元を覚悟で、Eメールで先生に謝罪文を送った…。果たして、何と! 僅か3時間足らずで返事がやってきた!!

「上林様。若いのですから情に流されることもあるでしょう。～中略～ 卑怯を恥じる心が強い君は見込みがあります。これからがんばってください。 藤原正彦」

『事実は小説よりも奇なり』。経験した事実を「奇なり」と認識するには、小説を読む必要があるだろう。現在、私は“小説=書物全般”と、広く解釈している。

※ 学術論文・学術刊行物等を除いた一般著書(エッセイ等)に限る

「わたしと図書館」

人間科学専攻 4回 塩崎 雅恵

Library Newsの発行100回記念、おめでとうございます。

「図書館と自分自身のかかわり」ということでつらつらと考えておりましたが、思えば、幼稚園以来ずっと図書館にはお世話になり続けています。摩訶不思議な民話や軽妙なエッセイ、重く熱いハードボイルドなど、ふと考えるだけでも図書館の本にあふれる物語で様々な体験をしました。読みふけてごはんを食べ忘れてたり、あまりに面白くて何度も何度も返却しては借りたことなど、数え切れない図書館との思い出があります。今は専門書を読む機会が多いですが、それでも新しい本に出会うたびにわくわくしているのは変わっていないようです。先日、実家から「あんたは子どもの頃から何もかわっちゃらんね(大分弁で、“何も変わっていないね”の意です)」、と写真が送られてきました。そこには、今とほとんど変わらないポーズで図書館の本に読みふける、小学生の私が写っており、何ともいえない気持ちになりました。この冊子を見て、おそらく何十年後かの私も図書館の本を片手に「あの頃から私は何もかわっちゃらんなあ」と思うのかもしれない。

そして、図書館の本に親しむと同時に、図書館という存在自体も非常に好きでした。ゆったりとした雰囲気のある公共図書館や、生徒の好きな本を把握してくださる司書の方がいた学校図書館、知の集積地として研究活動をサポートする大学図書館、と全く異なる顔を持っていますが、著作物を通じて「つながり」を得られる場所である、というのが図書館の大きな魅力ではないかと思っています。

単に図書館を利用しているあいだは、「本を書いた“誰か”」「かつてその本を読んだ“誰か”」「今

後その本を読む“誰か”とのつながりのみを実感していました。しかし、本学で図書館非常勤職員を経験してからは、利用する人と利用の支援をする人との「つながり」も感じられるようになったかと思えます。本学のOB・OGの方が来館されてかつての大学の様子のお話を伺ったり、締め切り間際の論文製作に焦る方に配慮したり、親子連れで来館された方が絵本で読み語りをしやすい部屋をご案内したりと、思い返すだけでもいろんな「つながり」の場面が思い出されます。

また、この冊子を通じて、誰かのオススメや研究テーマを知ることができ、本や人との「つながり」を実感させられました。

図書館を快適に利用するには、さまざまな準備が必要となります。私自身がその力になれることはわずかでしたが、それでもさまざまな勉強をすることができました。誰かの学びの中継点となり、学習やコミュニケーションが発展していく場である図書館に勤務する事ができて、本当によかったと思います。

私のすすめるこの1冊……花田 里欧子(附属教育実践総合センター 講師)

グレゴリー・ベイトソン著 佐藤良明訳 『精神と自然 — 生きた世界の認識論 —』

著者グレゴリー・ベイトソン (Gregory Bateson) は、しばしば「知の巨人」と称される 20 世紀を代表する思想家の一人です。人類学、社会学、言語学、精神医学、科学哲学、サイバネティクスなど学問領域を超えて思考した研究者であり、イルカのコミュニケーションの観察や精神病院で統合失調症患者とその家族のフィールドワークから、「ダブルバインド」という概念で象徴される独自のコミュニケーション理論を構築しました。

本書の導入では、彼が勤務先の大学で行った授業でのユニークな問いかけと学生とのやりとりが紹介されています。

用意してきた二つの紙袋の一つをあけると、私はゆでたてのカニを机の上に置き、彼らに向かってこんな挑発的な問いを發したのである。—「この物体が生物の死骸であるということを、私に納得のいくように説明してみなさい。そう、自分が火星人だと想定してみるのもいいだろう。生物とは火星で日常的に接しているし、君たち自身も生物である。しかしもちろんカニもエビも見たことはない。そこにこんな物体がいくつか降ってきたとする。そのほとんどは完全な姿をとどめてはいないが、観察の結果、これは生物の死骸だという結論に達したとする。だが、どうやって?」

「判断の基準は君たち自身だ。君たち自身から生物としての徴を引き出し、それと同じ徴をカニの中に見つけ出したまえ。」 (pp. 7-11)

本書は、カニにとどまらず、この問いを、「生きとし生けるものすべて」に対して向けます。そして、「生きとし生けるものすべてを結び合わせるパターン」への探求がなされていきます。

カニとエビを結びつけ、ランをサクラソウと結びつけ、これら四つの生き物を私自身と結びつけ、その私をあなたと結びつけるパターンとは?そしてわれわれ六個の生物を、片やアメーバへ、片や病棟の檻の中の分裂症患者へ結びつけるパターンとは?

(p.9)

答えを知りたい方は、ぜひ本書や、ベイトソンのその他著書「精神の生態学」「精神のコミュニケーション」等を手にとって読んでみてください。そして、「ベイトソンする」愉しさを味わってみてください(「ベイトソンする」とは、「いま見つめていることを、そのまわりのことと一緒に考えること」を意味する、訳者佐藤良明による造語)。

『精神と自然—生きた世界の認識論—』著者: Bateson, G. 訳者: 佐藤良明 発行所: 新思策社
発行年: 改訂版 2001年1月 購入手続き中

■ 図書館からのニュース

1. 図書の返却をお忘れなく！

冬季休業中の長期貸出の返却期日は1月8日（木）です。期日を過ぎると罰則がかかり、遅れた日数だけ貸出禁止となります。ご注意ください。

2. 春期休業に伴う長期貸出について

区分	学部学生	大学院生・教職員
貸出期間	1月21日(水)～3月30日(月)	1月6日(火)～3月13日(金)
貸出冊数	5冊	10冊
返却期日	2009年4月13日(月)	

* 視聴覚資料は除きます。

* 長期貸出図書については、貸出の更新はできません。

一度返却してから、翌日貸出の手続きをとってください。

* 卒業・修了予定者の返却期日は、2009年3月2日(月)です。

* 一般利用者の方は長期貸出の対象外となります。

3. 「うた」と「おはなし」の会を開催しました

12月14日（日）に附属図書館視聴覚教室で「うたとおはなしの会」を開催した。幼児教育科音楽教育ゼミに所属する学生が中心となって、毎年春と秋に開催してきたこの会も第11回目を迎え、参加者の要望もあって初めて12月のクリスマスシーズンに行うこととした。当日は、朝まで降っていた雨も上がり107名の親子が、寒い冬やクリスマスをテーマにしたお話や歌で和やかなひと時を過ごした。

今回は、特に、子どもたちだけでなく、子どもの頃から繰り返し読み親しんできた作品をお父さんやお母さんから次の世代の子どもたちに語り継いでもらいたいという思いから、ウクライナ民話で有名な「てぶくろ」、子どもたちに人気の「ぐりとぐらシリーズ」から「ぐりとぐらのおきやくさま」の2作品を取り上げ、絵本ではなくパネルシアターで演じたり、動物たちの「てぶくろにすんでいるのはだあれ」「わたしもいれて」という繰り返しの問答に、観客の子どもたちが盛んに声を出して答えたり、「てぶくろてぶくろぎゅっぎゅっぎゅっ…」という挿入歌に合わせて身体を揺らすなど、演者と観客が一体となる姿が多く見られた。また、大型絵本「ぐりとぐらのおきやくさま」では、最後の場面でサンタクロースが登場し、クリスマスケーキをみんなで食べるシーンでは、子どもたちが身を乗り出して見入っていた。また、「いとまき」「一匹の野ねずみ」「コンコンクシヤンのうた」の手遊びコーナー、「あわてんぼうのサンタクロース」「おもちゃのチャチャチャ」の楽器遊びコーナー、「サンタクロースの5人兄弟」のパネルシアター等、そして、エンディングでは、幼児教育科1回生10名が「We Wish a Merry Christmas」をトーンチャイムで演奏し、暖かくて美しい響きにそれまではしゃいでいた子どもたちもじっと聴き入っていた。

帰りには折り紙で作った赤いサンタブーツをもらい、会場で歌ったクリスマスの歌を歌いながら楽しそうに帰る親子の姿が印象的であった。参加者から「クリスマス感がたっぷりとても素敵でした!」「またこの時期に会を企画してほしい」「友だちの親子にも是非教えたいたい」などの意見が寄せられ、好評のうちに終了することができた。寒い時期ではあるが、学生と地域の子もたちとの暖かい心の交流ができたことを心から嬉しく思う。（文 幼児教育科 平井准教授）



4. 図書館西側地盤調査について

土地地盤調査のため、下記のとおりボーリング調査を行います。ボーリングによる打撃音が発生し、ご迷惑をお掛けしますが、ご協力方よろしくお願いたします。

- 【作業場所】 附属図書館西側（事務局北側）植樹帯部分
- 【作業期間】 平成21年 1月 6日（火）～8日（木）
- 【作業時間】 8時30分～17時30分

5. 現物確認調査(蔵書点検)終了

12月10日(水)の休館日に附属図書館開架分の資料(約8万点)の現物確認調査(蔵書点検)を実施しました。この調査は、資産台帳との照合が主な目的ですが、正しい場所に戻されていない資料が多く見付き、調査に支障をきたしました。今後とも、図書館において利用されました資料は、必ず元の場所に戻して頂くよう、ご協力願います。



■ 論のくちび理のむすび・・・後藤 景子(家政科 教授)

「制服を利用した衣生活教育カリキュラムの提案」

後藤景子・山中綾美：京都教育大学紀要 No.113： pp.91-100 2008

日本の中学校や高等学校の多くは制服の着用を義務づけています。制服は学校での学習活動のために着用するだけではありません。カジュアルな生活もカバーし、冠婚葬祭などの儀式でも着用可能なオールインワン型衣服です。3年間の着用を考慮して、取り扱い易さ、機能性、活動性、安全性、人体サイズの変化、着崩し、着用や洗濯に対する耐久性など、様々な観点から素材や縫製に適切な選択や工夫がされ、極めて完成度が高い衣服です。制服の構成は、ブレザー、ズボン、スカート、シャツ、ブラウスなど、代表的な衣服アイテムを包括しています。制服は下着、靴下、ニット製品、外衣などと組み合わせてほぼ毎日着用しますので、着装、手入れ、収納などには多くの留意点が必要です。不用になった制服を一括して回収すれば、リサイクルに関して幅広い方法が可能です。

この論文では、高等学校家庭科において衣生活全般に関わる系統的な学習を保証するために、制服を利用した衣生活教育カリキュラムを提案しています。つまり、健康で快適な衣の消費生活を営むためには、着用目的、素材、加工、縫製、着方、手入れ、補修、収納、およびリサイクルなど、広範囲の知識や技能を習得する必要があります。したがって、全ての衣服アイテムを対象とすると学習に多くの時間を要します。そこで、特定の衣服を取り上げ、生活での実践と並行しながら学習するのが効果的であると考えられます。代表的な衣服アイテムで構成されており、生徒に最も身近な制服を切り口として学習した内容は、衣服・衣生活全般に必要な知識と技能の習得へと発展可能です。

今後はこの学習内容を消費者教育へと発展させて衣の消費に関する知識や技能の普及に努め、心身ともに健康で快適な衣生活の実現につなげたいと考えております。

全文は図書館HP「京都教育大学紀要」で、ご覧いただけます。

■ 図書館開館スケジュール



(通 常)

開館時間： 9:00

閉館時間： 21:00

一部期間は 17:00 に閉館します

下記カレンダー「～17:00」と記載

1

日 SUN	月 MON	火 TUE	水 WED	木 THU	金 FRI	土 SAT
				1 祝	2	3
				休館	休館	休館
4	5	6	7 整	8	9	10
休館	休館		休館			～17:00
11	12 祝	13	14	15	16	17
休館	休館				休館	休館
18	19	20	21	22	23	24
休館						～17:00
25	26	27	28	29	30	31
休館						～17:00

1月5日(月)まで年始のため休館します。
 1月7日(水)は館内整理のため休館します。
 1月12日(月)は祝日のため休館します。
 1月16日(金)から18日(日)まで入試センター試験のため休館します

2

日 SUN	月 MON	火 TUE	水 WED	木 THU	金 FRI	土 SAT
1	2	3	4 整	5 臨	6	7
休館			休館	休館		～17:00
8	9	10	11 祝	12	13	14
休館			休館			～17:00
15	16	17	18	19	20	21
休館						～17:00
22	23	24	25	26	27	28
休館			休館	休館		～17:00
29	30					
休館						

2月4日(水)・5日(木)は館内整理及び入退館システム更新のため休館します。
 2月11日(水)は祝日のため休館します。
 2月25日(水)・26日(木)は入試のため休館します。

あけましておめでとうございます。

100号記念号はいかがでしたでしょうか?これからも「知への誘い」として「図書館ニュース」の紙面を充実させ、情報を発信していきたいと思ひます。「知の宝庫」の図書館を是非ご利用ください。

京教図書館 News No. 100 2009年1月号
 編集発行：京都教育大学附属図書館
 発行日：平成21年1月5日
 内容に関するお問い合わせ先：
 附属図書館(内線8176)